

日本感情心理学会第 23 回大会

大会プログラム



新渡戸文化短期大学（東京都中野区）

2015年6月13日（土）・14日（日）

ご挨拶

このたび、感情心理学会第23回大会を6月13日-14日に新渡戸文化短期大学で開催させていただくことになりました。50年以上の伝統ある学園ではありますが、アカデミックな学会大会の開催はこの「日本感情心理学会」が初めであり、大変貴重な学会大会となります。

新渡戸文化短期大学は、1927年の女子文化高等学院、1928年の女子経済専門学校を経て、1950年に東京文化短期大学として開学し女子教育に力を入れてきました。こののち共学化を経て、2010年に初代校長で本学の教育に尽力された新渡戸稲造先生の理念を継承し全面に押し出すかたちで「新渡戸文化短期大学」と校名を変更し現在に至っております。新渡戸稲造先生は、国際連盟の事務次長を務め、「武士道」を通じて世界に日本を紹介した国際人、多くの大学で女子教育に力を入れた教育者でもあります。新渡戸文化学園は、子ども園、小学校（およびアフタースクール）、中学校、高校、短期大学までが併設され、新渡戸文化短期大学は、保育士、栄養士、臨床検査技師といった国家資格者を養成しております。また、「保育士」は音楽などを通じた子どもの情緒、「栄養士」は食物への態度・感情、「臨床検査技師」は生理機能検査といった「感情」という視点が非常に重要な国家資格でもあります。

大会シンポジウムでは、「社会性と感情」をテーマに、「発達」と「脳科学」領域における最先端の研究者をお迎えし、感情研究に関わる最新の知見紹介や議論が期待されます。

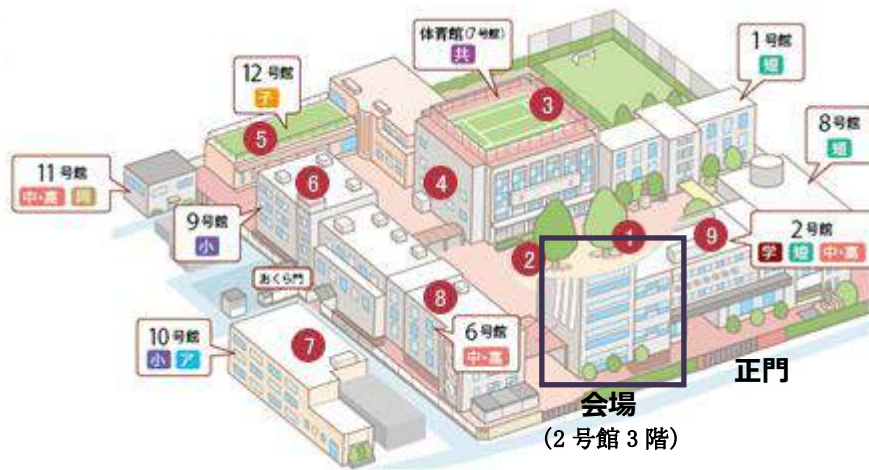
大会会場は、前々回の東北大会、前回の宇都宮大会、そして今回は東京都中野区と、久しぶりの東京大会になります。東京は、いよいよ5年後となる2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向け開催都市および首都として街も大きな発展機運にあります。

東京都中野区は、近年、大学も増え、中野サンプラザをシンボルに、国際的にも評判の高いアニメ・漫画といったサブカルチャー、また雑誌でも著名なラーメン店が数多くあるなど“文化”発信の街でもあります。中野駅は、JR中央線・総武線、さらに地下鉄の丸ノ内線、東西線、多くのバスが整備され、都内各地に行かれるにもたいへん交通至便です。

開催校の最寄り駅となる「東高円寺駅」も都心ターミナル駅である「新宿」から地下鉄丸ノ内線で10分以内であり、会場となる「新渡戸文化短期大学」も駅から徒歩10分以内ですので、立地も良好です。

ぜひこの機会に、2020年のオリンピックに向け発展を遂げつつある首都「東京」、教育都市・サブカルチャーの街である「中野区」にお越し頂ければと思います。会員の皆様をはじめ、多くの方の大会へのご参加を心よりお待ちしております。

大会会場周辺地図（新渡戸文化学園本部校舎）

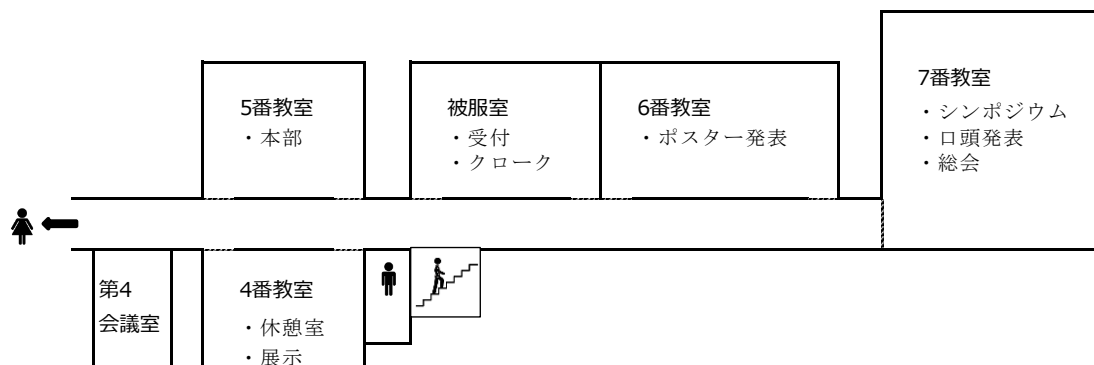


大会の会場は、正門を入れてすぐの2号館3階です。

同じく2号館地下1階の第2カフェテリアが懇親会会場です。

大会会場案内

【新渡戸文化学園本部校舎 2号館 3階見取り図】



- 受付, クロークは階段正面の被服室です。
- 階段を上がって右手奥の7番教室にて, シンポジウム, 口頭発表, 総会を行います。
- 6番教室がポスター発表の会場です。
- 階段あがって左手の4番教室が休憩室および展示会場です。
- 大会2日目のお昼に開催される編集委員会の会場は第4会議室です。

会場までのアクセス

【新渡戸文化学園本部校舎までの交通案内】

- 東京メトロ 丸ノ内線 東高円寺駅 下車 徒歩 5 分
- JR 中央線 / 東京メトロ 東西線 南口下車 徒歩 15 分

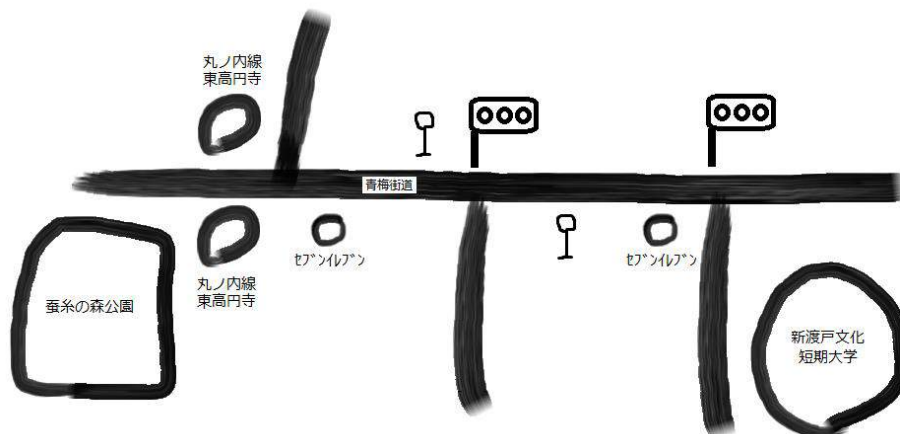
【主要駅からの路線図】



【東高円寺駅への主要な駅からの所要時間】

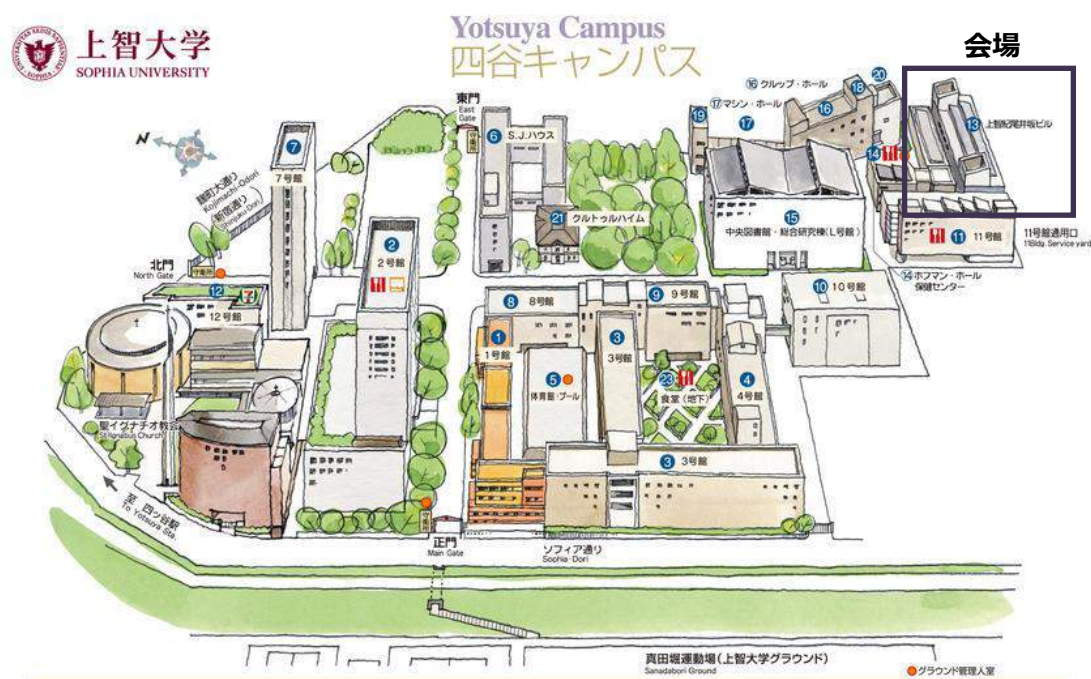
- JR 新宿駅から：東京メトロ丸ノ内線で「東高円寺」…所要時間 7 分
- JR 荻窪駅から：東京メトロ丸ノ内線で「東高円寺」…所要時間 6 分
- JR 東京駅から：東京メトロ丸ノ内線で「東高円寺」…所要時間 26 分
- JR 渋谷駅から：JR 新宿駅乗換東京メトロ丸ノ内線「東高円寺」…所要時間 25 分

【東高円寺駅から新渡戸文化学園へのルート（徒歩 5 分）】



【(前日開催) 若手感情研究者ワークショップ会場のご案内】

- 会場：上智大学四谷キャンパス 紀尾井坂ビル B101 教室
- キャンパスまでのアクセスは[こちら](#)
(JR 中央線，東京メトロ丸ノ内線・南北線の四ツ谷駅麴町口・赤坂口から徒歩 5 分)
※キャンパス内に駐車場はありません。
- 会場教室までは正門から約 3 分。下図⑬の建物の地下 1 階。
- wi-fi 環境の提供はございません。



大会スケジュール

	大会 0 日目 6月12日 (金)	大会 1 日目 6月13日 (土)	大会 2 日目 6月14日 (日)
8:30			
9:00		受付開始	受付開始
9:30			
10:00		ポスター発表 ①	ポスター発表 ②
10:30			
11:00		口頭発表 ①	口頭発表 ③
11:30			
12:00			
12:30		休憩	休憩
		懇談会	編集委員会
13:00			
13:30			
14:00		口頭発表 ②	シンポジウム 2 「感情の脳科学」 (13:00 ~ 15:00)
14:30			
15:00		休憩	
15:30			総会
16:00	若手感情研究者 ワークショップ 「感情研究の現在を 読む 2」 (15:15 ~ 17:45) (場所：上智大学)	シンポジウム 1 「感情と社会性の 発達」 (15:10 ~ 17:10)	
17:00			
17:30			
18:00			
18:30	常任理事会 (18:00~19:00)	懇親会 (新渡戸文化短期大学 第2カフェテリア)	
19:00			
19:30			
20:00			

大会行事等

1. 一般研究発表

大会両日にわたり、口頭発表とポスター発表が行われます。会場は口頭発表が7番教室、ポスター発表が6番教室です。

2. シンポジウム

2つのシンポジウムが企画されています。シンポジウム1「感情と社会性の発達」は大会1日目、シンポジウム2「感情の脳科学」は大会2日目に開催されます。いずれも会場は7番教室です。

3. 総会

2015年度総会は大会2日目15:00～、7番教室にて開催されます。

4. 各種委員会

- (1) 常任理事会・理事会が、大会前日6月12日(金)18:00～19:00に上智大学(四ツ谷キャンパス)9号館5階心理学科図書資料室で開催されます。
- (2) 編集委員会が、6月14日(日)12:00～13:00に第4会議室で開催されます。

5. 懇親会

新渡戸文化学園本町校舎の第2カフェテリアにて、1日目の17:30～19:30まで、懇親会を開催いたします。大会参加者同士の貴重な直接の交流の機会をぜひお楽しみください。

6. 展示

4番教室に展示スペースを設けます。ぜひお立ち寄りください。

7. 大会関連企画

若手研究者の研究活動支援の一環として、大会前日6月12日(金)15:15～17:45に「感情研究の現在を読む2」と題した読書会が開催されます。会場は上智大学(四ツ谷キャンパス)紀尾井坂ビルB101教室です。学会の主会場とは異なる場所での開催となりますのでご注意ください。

大会参加者へのご案内

1. 大会受付

場 所 新渡戸文化学園本町校舎 2 号館 3 階

時 間 6 月 13 日 (土) 9:00～17:30

6 月 14 日 (日) 9:00～15:00

2. 大会参加費

(1) 事前予約参加者の方

受付にお立ち寄りください。受付でお名前をお聞きし、予約参加について確認いたします。その後、参加証をお渡しいたします。

予約参加の方

大会参加費

正会員 (一般) 6,000 円

正会員 (院生) 5,000 円

学生会員 (非会員を含む) 1,000 円

非会員 (一般) 7,000 円

懇親会費

一般 6,000 円

学生 (大学院生を含む) 4,000 円

(2) 当日参加 (非会員を含む) の方

大会参加費 (当日参加)

正会員 (一般) 7,000 円

正会員 (院生) 6,000 円

学生会員 (非会員を含む) 2,000 円

非会員 (一般) 8,000 円

懇親会費 (当日参加)

正会員 (一般) 7,000 円

学生会員 (大学院生を含む) 5,000 円

一般 (非会員) 8,000 円

3. クローク

大会期間中、受付横の被服室に設けております。貴重品は各自でお持ちいただきますようお願いいたします。懇親会の間は、懇親会会場にお荷物をお持ちください。

4. 昼食

大会会場の建物内には昼食を購入できる場所がございません。昼食をご持参いただくか、近隣の食事処をご利用ください。お食事処マップを準備予定です。

研究発表者へのご案内

1. 口頭発表の方へ

会場に Windows PC (Windows 7, Office 2013) を 1 台ご用意致します。使用可能なソフトウェアは PowerPoint (Microsoft Office2013)のみですので、ご注意ください。発表当日、ご発表前に USB メモリ等にデータを入れてデータをご持参ください。インターネット接続はできませんのでご了承ください。なお、ご用意いただくファイル名は、以下の通りでお願いします。

「JSRE2015_OS01～16」 OS 以下に各自に割り振られた番号を記入してください。

口頭発表 1 題の持ち時間は 15 分です。1 鈴：10 分，2 鈴：12 分（発表終了の目安）
3 鈴：15 分（質疑応答を含む発表終了）となります。

2. ポスター発表の方へ

掲示用ボードのサイズはヨコ 90cm×タテ 210cm です。このサイズに収まるようにポスターをご作成願います。

(1) 在席責任時間：当該セッション中の 60 分間となります。セッション開始後 30 分前後の時間帯に会場係が出欠をとりに伺いますので、ご協力ください。

(2) 自由掲示時間：ポスター発表の会場は、正規の掲示時間に拘らず発表当日の 9 時から 16 時 30 分まで使用できます。したがって、大会 1 日目に発表ご担当の方は大会 1 日目の夕方まで、大会 2 日目に担当の方は大会 2 日目の夕方までポスターを掲示し、自由にディスカッションいただいても構いません。なお、各日の 16 時 30 分を過ぎても掲示されているポスターは事務局にて撤去・処分いたしますので、あらかじめご了承ください。

3. 共通事項

登録完了後、発表論文をご作成いただき、期日までにご提出いただくことが発表が公式に記録される要件となります。

詳細は以下の通りです。発表前にご提出いただいても構いませんが、締切り厳守でお願い申し上げます。

様式 大会サイト (<http://jsre.wdc-jp.com/conf/2015/submit.html>) からダウンロードしてご使用ください。

期日 6 月 28 日 (日)

宛先 日本感情心理学会第 23 回大会準備委員会 (jsre2015@gmail.com)

大会関連若手企画

大会前日、6月12日（金）15:15～、以下の通り若手研究者による研究集会（YER ワークショップ）が開催されます。参加は会員に限りませんが、参加費は無料です。

「感情研究の現在を読む2」

日時：6月12日（金） 15：15-17：45

場所：上智大学 紀尾井坂ビル地下1階 B-101 教室

会費：無料

企画	藤原 健	大阪経済大学
	木村健太	独立行政法人産業技術総合研究所
	藤村友美	独立行政法人産業技術総合研究所

企画趣旨：国内外、あるいは分野の壁を越えて、感情というテーマは今も多くの研究者を魅了し続けている。たとえば昨年度の日本心理学会大会では、感情を題材としたシンポジウムやワークショップが多く企画された。また、James Russell が来日し、感情研究の展望を語ったのも記憶に新しい。このような流れを横目にみつつも、他方、今後の感情研究を担っていくべき若手にとっては、自身の視点を定め、方法論的・理論的基盤を構築していくことが求められるであろう。どのように感情研究を展開するのか、感情研究とどう接するのか、考えるべき課題は山積みである。

そこで、昨年度に引き続き、感情心理学会の若手企画として「感情研究の現在を読む2」と題した読書会を企画したい。題材については昨年度と同様に、Emotion Review を中心に用いることとする。

ただし、昨年とは趣向を変え、学会内の「自称若手」を対象として広く発表者を募ることとしたい。発表者には Emotion Review 内の論文を紹介してもらっただけでなく、指定討論のような形で個人的見解（素朴な質問も可）を交えて発表してもらっ（約20分）。これらを議論の素地として、参加者全員で好きなことを言い合いながら（約30分）、今後の感情研究の方向性を見定められるような会にしたい（1件の発表につき約50分、計3件を予定）。もちろん、当日は非発表者も奮ってご参加いただきたいと考えている。

発表内容：

木村健太 (産総研) ・ 小形佳祐 (東北大)

6 (4) Four Perspectives on the Psychology of Emotion

藤村友美 (産総研) ・ 白井真理子 (同志社大)

7 (1) Gender and Emotion

藤原 健 (大経大) ・ 大上真礼 (東京大)

6 (3) Culture, Meaning, and Interaction in Sociology

連絡 企画に関するご意見やご質問、発表の自薦・他薦については藤原 (ken.fuji [at] osaka-ue.ac.jp)までご連絡ください。また、Emotion Review の本文が入手できない場合はご相談ください。

発表プログラム

注) #印は日本感情心理学会会員以外であることを示す。

シンポジウム

シンポジウム 1「感情と社会性の発達」

6月13日（土） 大会初日 15:10～17:10 7番教室

企画：日本感情心理学会第23回大会準備委員会

司会：永房典之（新渡戸文化短期大学）

話題提供者： 板倉昭二（京都大学）

「乳児の向社会性と感情」

久保ゆかり（東洋大学）

「幼児の感情語りの世界；自他理解への道」

渡辺弥生（法政大学）

「児童の感情リテラシーは教育しうるか。」

指定討論者： 遠藤利彦（東京大学）

シンポジウム 2「感情の脳科学」

6月14日（日） 大会2日目 13:00～15:00 7番教室

企画：日本感情心理学会第23回大会準備委員会

司会：永房典之（新渡戸文化短期大学）

話題提供者： 石田裕昭（東京都医学総合研究所）

「他者の感覚・情動を推測する脳メカニズム」

日道俊之（京都大学・日本学術振興会）

「共感における遺伝的要因の影響メカニズムの検討：

イメージング・ジェネティクス的研究から」

高橋英彦（京都大学）

「社会的情動の認知神経科学と精神科臨床との接点」

指定討論者： 大平英樹（名古屋大学）

研究発表（口頭発表）

6月13日（土） 大会初日 口頭発表① 10:30～12:00

座長：藤原 健（大阪経済大学人間科学部）

OS01. 文化的自己観は感情認識の明瞭性と関連するか

——内受容感覚を媒介として——

金井雅仁（筑波大学大学院人間総合科学研究科・日本学術振興会）

湯川進太郎（筑波大学人間系）

OS02. 感情推測の正確さ —個人内変動と個人間変動に着目した検討—

藤原 健（大阪経済大学人間科学部）

OS03. 動画および静止画表情刺激データベースの構築

藤村友美（産業技術総合研究所人間情報研究部門）

長谷川良平[#]（産業技術総合研究所人間情報研究部門）

OS04. 侵入頻度が高いネガティブな記憶の特徴

—大学生に適した筆記表現法の作成に向けた予備調査—

小川 将（中央大学大学院）

兵藤宗吉（中央大学文学部）

OS05. 鉄道運転シミュレータにおける運転中の感情の変化

和田一成（西日本旅客鉄道株式会社 安全研究所）

田所和孝[#]（西日本旅客鉄道株式会社）

上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社 安全研究所）

6月13日(土) 大会初日 口頭発表② 13:00~15:00

座長：石井辰典（東京成徳大学応用心理学部）

OS06. 感謝表出が表出者の印象に及ぼす影響

—被表出者は表出者のことをどう思うのか—

蔵永 瞳（就実短期大学幼児教育学科）

樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）

福田哲也（上智大学総合人間科学部）

OS07. 家族愛を描いた映像に対する感動が家族への態度に及ぼす影響

加藤樹里（一橋大学大学院）

村田光二（一橋大学大学院）

OS08. 羞恥表出の謝罪機能に関する検討

福田哲也（上智大学総合人間科学部）

OS09. 韓国人大学生における顕在的・潜在的自尊感情の不一致と心理的適応の関連

—不一致の「大きさ」と「方向」に注目して—

藤井 勉（Sungshin Women's University）

OS10. 罪悪感は本当に謝罪を促進するのか？

八木彩乃（神戸大学大学院人文学研究科）

大坪庸介（神戸大学大学院人文学研究科）

OS11. なぜ不公正者の不幸を喜んでしまうのか：

サンクション行動傾向とシャーデンフロイデの関連

石井辰典（東京成徳大学応用心理学部）

澤田匡人（宇都宮大学教育学部）

6月14日(日) 大会2日目 口頭発表③ 10:30~12:00

座長：金築 優（法政大学現代福祉学部臨床心理学科）

- OS12. 連続した負け体験は結果の重要性を高める —事象関連電位を用いて—
亀井誠生（立命館大学スポーツ健康科学研究科）
佐久間春夫[#]（立命館大学スポーツ健康科学部）
- OS13. 恐怖はどこへ行った？ —逆行阻止の生起メカニズムに関する実験的検討—
沼田恵太郎（大阪大学大学院人間科学研究科）
- OS14. 不快感情の制御困難性に関する知覚制御理論的考察
金築 優（法政大学現代福祉学部臨床心理学科）
金築智美[#]（東京電機大学工学部人間科学系列）
- OS15. 音楽による鳥肌感と涙感の同時生起がもたらす自律神経活動の多重変化
森 数馬（慶應義塾大学先端研究センター）
岩永 誠（広島大学大学院総合科学研究科）
- OS16. 事前の特別な呼吸法が心拍変動に及ぼす影響
上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）
和田一成（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）
臼井伸之介[#]（大阪大学大学院人間科学研究科）

研究発表（ポスター発表）

6月13日（土） 大会初日 ポスター発表① 9：30～10：30

PS01. 怒りと不安がポジティブ／ネガティブ事象の生起確率の推定に
及ぼす影響について

佐藤重隆（東洋大学大学院）

戸梶亜紀彦（東洋大学社会学部社会心理学科）

PS02. 不快感情に対するプロテクティブ・フレームの効果検証

岩城達也（広島国際大学）

谷脇佑太郎[#]（広島国際大学）

嵩原広宙[#]（広島国際大学）

PS03. 繰り返し想起される不快エピソードの機能

神谷俊次（名城大学人間学部）

PS04. 罪悪感操作における罪悪感と恥感情の生起に関するメタ分析

古川善也（広島大学大学院教育学研究科教育人間科学専攻）

中島健一郎[#]（広島大学大学院教育学研究科）

森永康子[#]（広島大学大学院教育学研究科）

PS05. 嫌いなヤツは助けたくない ー対人嫌悪と援助傾向の関係ー

河野和明（東海学園大学人文学部心理学科）

羽成隆司（椋山女学園大学文化情報学部）

伊藤君男（東海学園大学人文学部心理学科）

PS06. 妬み喚起場面と妬みの種類

浅川萌生（筑波大学大学院人間総合科学研究科心理専攻）

望月 聡（筑波大学人間系）

PS07. 児童の情動知能に関する教師と児童の認識

ー感情表現が苦手な児童はそのことを自覚しているのかー

山田洋平（梅光学院大学子ども学部）

- PS08. 高齢者の信頼性判断は外見の影響を受け続ける
鈴木敦命（名古屋大学環境学研究科）
- PS09. 子どもの表情変化に対する認知と情動反応
中田 栄（帝京大学）
- PS10. 児童期後期における規則・対人場面の役割取得能力とクラス内行動,
学校肯定感・回避感の関係
本間優子（新潟青稜大学）
内山伊知郎（同志社大学）
- PS11. 青年期のアレキシサイミア傾向の検討
反中亜弓（瀬戸少年院）
寺井堅祐[#]（福井赤十字病院）
梅沢章男[#]（放送大学福井学習センター）
- PS12. 協調的なメール交換過程における顔文字の返報性規範の影響
山本恭子（神戸学院大学）
木村昌紀（神戸女学院大学）
- PS13. 無表情の感情価 —既知条件と未知条件の比較—
柴田利男（北星学園大学社会福祉学部）
- PS14. 快感情・不快感情の喚起に適した映像刺激の検討
高田琢弘（筑波大学大学院人間総合科学研究科・日本学術振興会）
湯川進太郎（筑波大学人間系）
- PS15. 感情連想語における Zipf の法則
竹原卓真（同志社大学）
鈴木直人（同志社大学）
- PS16. 表情の情動認知の正確さ得点算出の試み
—自記式尺度との基準関連妥当性の検討—
松尾和弥（甲南大学大学院）
福井義一（甲南大学文学部）
- PS17. 感情価と覚醒度に基づく刺激語の作成
木村年晶（同志社大学 こころの科学研究センター）
鈴木直人（同志社大学心理学部）

- PS18. ネガティブではない感情による泣き：何歳頃、どのような状況で生じるのか
 和田由美子（九州ルーテル学院大学人文学部）
 吉田ゆう美[#]（九州ルーテル学院大学人文学部）
- PS19. 社会人におけるレジリエンスについて ―雇用形態と性別による相違の検討―
 戸梶亜紀彦（東洋大学）
- PS20. マグレガー理論の“底流”について
 ―論文「労働組合と経営者の協働」を中心に―
 村田晋也（愛媛大学）

6月14日（日） 大会2日目 ポスター発表② 9：30～10：30

- PS21. 被害者としての店舗の万引き犯に対する感情の検討
 大久保智生（香川大学教育学部）
- PS22. 大学生の協同作業に対する認識と情動知能との関連
 橋本由里（島根県立大学看護学部）
 平井由佳[#]（島根県立大学看護学部）
 飯塚雄一[#]（島根県立大学短期大学部）
- PS23. 看護師の感情と他者とのかかわりの内容に関する研究
 ―Study on the involvement with others person of nurses―
 石井慎一郎（自治医科大学看護学部）
- PS24. 尊敬関連感情概念の階層的意味構造の再検討
 武藤世良（東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会）
- PS25. 相手との将来を見据えて嘘をつく
 ―対人葛藤状況と関係性が利他的な嘘の利益とコストの想定に与える影響―
 菊地史倫（公益財団法人鉄道総合技術研究所）
 佐藤 拓（いわき明星大学教養学部）
- PS26. 対人場面における感情コミュニケーションのすれ違い度合いの検証
 原邊祥弘（帝塚山学院大学人間科学部）
- PS27. 面子喪失感に関する感情カテゴリーの検討―質問紙調査による日中比較―
 林 萍萍（神戸大学国際文化研究科）
 米谷 淳（神戸大学 大学教育推進機構）

- PS28. タイ人の怒りの誘因に関する面接調査
堀本美都子（神戸大学国際文化科学研究科）
米谷 淳（神戸大学 大学教育推進機構）
- PS29. 児童生徒の生活不安と怒り感情に関する国際比較研究
—日本と北欧諸国の児童生徒を対象にして—
藤井義久（岩手大学教育学部）
- PS30. 食物の色彩が視覚的な感性評価に与える影響
岩佐和典（就実大学）
- PS31. 腹式呼吸法の実施に伴う生理・心理的変動（1）：
呼気の長さに関する実験的検討
高橋研人（東北文化学園大学院健康社会システム研究科）
佐藤俊彦（東北文化学園大学院健康社会システム研究科）
- PS32. 先行する認知的評価は後続する認知的感情制御の効果を調整するか
—短期縦断研究による検討—
榎原良太（東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会）
- PS33. ネガティブな出来事に対して用いる感情制御方略について
—悲しみ・怒りを感じた出来事への対処方法—
平井 花（学習院大学文学部心理学科）
- PS34. ポジティブ感情の分化とその特徴
菅原大地（筑波大学人間総合科学研究科）
杉江 征[#]（筑波大学人間系心理学域）
- PS35. 愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが共感性に及ぼす影響
—潜在連合テスト（IAT）を用いた検討—
大浦真一（甲南大学大学院人文科学研究科）
福井義一（甲南大学文学部）
- PS36. ユーモアスタイルと生きがい感および幸福感との関連
—関祥佑（大正大学大学院人間学研究科臨床心理学専攻）
- PS37. 感じ方の違うポジティブ感情を喚起する方法についての予備検討
木村健太（産業技術総合研究所自動車ヒューマンファクター
研究センター）
眞田和恵[#]（花王株式会社香料開発研究所）
門地(仙波)里絵（花王株式会社香料開発研究所）

PS38. 感動喚起が刺激の情報伝達に及ぼす影響

山本品友（上智大学大学院総合人間科学研究科）

久保池香奈[#]（さいたま市役所）

樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）

PS39. 依頼時における女性の笑顔表出の効果の検討

宮武沙苗（上智大学大学院総合人間科学研究科）

松下千紘[#]（株式会社マクロミル）

樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）

PS40. 笑顔による集団間バイアス是正効果の検討

樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）

野間孝太[#]（日本甜菜製糖株式会社）

発表要旨

シンポジウム

シンポジウム 1「感情と社会性の発達」

6月13日（土） 大会初日 15:10～17:10 7番教室

企画：日本感情心理学会第23回大会準備委員会

司会：永房典之（新渡戸文化短期大学）

話題提供者： 板倉昭二（京都大学）

「乳児の向社会性と感情」

久保ゆかり（東洋大学）

「幼児の感情語りの世界；自他理解への道」

渡辺弥生（法政大学）

「児童の感情リテラシーは教育しうるか。」

指定討論者： 遠藤利彦（東京大学）

1. 企画主旨

ヒト（人間）の社会的適応、特に他者との「関係性」の形成・維持・発展・修復には、喜怒哀楽、共感、恥・罪悪感・嫉妬・妬みなどといった感情が重要な役割を示していると考えられる。また、それらの感情は、発達時期によってもその重要性が異なるのではないだろうか。ヒト（人間）としての共通特徴と、生涯発達としての発達の特徴について、特に感情が社会性に果たす役割について議論したい。

本大会企画では、発達をはじめ、感情、社会性について精力的な研究を行っている3者を迎え、感情と社会性の発達について議論を試みる。指定討論者には、社会性にもかかわるアタッチメントをはじめ、発達、感情についての研究に大変造詣が深い遠藤利彦氏を迎える。

2. 話題提供者の要旨

板倉 昭二 「乳児の向社会性と感情」

感情の発達は、初期の発達の研究の中でもあまり研究されていない領域のひとつである。特に、言語発達や認知発達と比べるとその研究の少なさが際立つ。それどころか、社会性の発達研究と比べても多いたとはいえない。社会性の発達と感情の発達には、何らかの関係

があり、感情の発達には社会的文脈の視点から考えることの必要性は疑うべくもないことである。

本講演では、乳児における共感的同情的感情と向社会性の発達について論じる。そうした研究の先駆けとなったのが Hamlin らの研究である (Hamlin et al., 2007)。Hamlin らは、6 ヶ月児と 10 ヶ月児を対象に、刺激となる物体の相互作用から、善悪を判断し、それらの物体に対して、社会的評価を行うことを報告した。彼らの実験では、良い行い（他者を助ける）をする図形と、悪い行い（他者の行為を邪魔する）をする図形がアニメーションによって呈示され、その後、それらの図形の実物を選択させた。その結果、6 ヶ月児、9 ヶ月児ともに、良い行いをするエージェントの物体を選択した。すなわち、発達初期の早い段階でも、乳児は、事の善悪を判断していることが示されたのである。

続いて、同情や共感行動に限定した場合の個体発生的起源について、演者らのオリジナルの研究を紹介しつつ論じることにする。Kanakogi らは、幾何学図形のアニメーション刺激を 10 ヶ月児に見せ、同情的萌芽がすでに認められる可能性を示した (Kanakogi et al., 2012)。実験では、まず参加児に、2 つの幾何学図形が、「攻撃する・攻撃される」の関係に見えるようなアニメーション刺激（攻撃的相互作用条件）、また同様の動きは示すものの、接触がないので、攻撃・被攻撃の関係には見えない刺激（相互作用なし条件）を先行刺激として呈示した。その後、それぞれの幾何学図形の実物を参加児の眼前に呈示し、どちらを選択するかを調べた。攻撃的相互作用条件の参加児は、有意に被攻撃側の物体を選択したが、相互作用なし条件の参加児は、その限りではなかった。この結果は、10 ヶ月児が、先行呈示された刺激における 2 つの物体の相互作用に基づいて、それぞれに異なる印象を形成し、被攻撃側の物体を選好したことを示すものである。その結果、一連の研究から、前言語期の 10 ヶ月児において、すでに同情的行動の萌芽が認められることわかった。

久保ゆかり 「幼児の感情語りの世界；自他理解への道」

感情の生涯発達からみると、幼児期の特徴としては、感情経験について語り始めるということが挙げられよう (Fivush et al., 2011)。それは自身の感情をメタ的に理解することを促し、他者の感情を理解することに役立つだろう。本発表では、幼児の感情語りの世界を素描していきたい。

感情語りの世界の先達者は、養育者などの大人であり、子どもは大人とのやりとりの中で、感情語りをスタートさせる。それは、感情についての徒弟制 (Appleman & Wolf, 2003)、感情についてのコーチング (Gottman et al., 1997)、過去の出来事についての共同構成 (Fivush & Kuebli, 1997) として捉えられる。大人の足場かけのもと、幼児の感情語りが育まれていく。幼児はそのような会話の中であれば、豊かな自他理解を示すことが示唆されている。養育者との会話における一児の語りを分析した坂上 (2012) は、自己についての多面性が 5 歳にかけて語られるようになることを見出している。

それでは、感情の多面性についてはどうだろうか。筆者は、園の発表会行事について、4～6歳児各々にインタビューをし（久保、2014）、また園生活を参与観察しつつ、4歳児の3年間を追った（久保、準備中）。その結果、4歳時点では単一の感情を語るが多かったが、5歳時点では促しを受ければ異なる感情を語るが増え、6歳時点ではさらに、異なる感情をひとまとまりのものとして語るが見出された。従来の感情理解研究では、幼児は異なる感情が両立し得ることを理解できないと考えられてきた（Harter & Buddin, 1987）が、参与観察等によって文脈を共有する者が園生活場面についてインタビューするのであれば、従来の指摘よりも豊かな感情語りを示し得ることがうかがえる。また保育実践には、感情を語る仕組みが組み込まれているように見え、子どもは保育者等とのやりとりの中で、感情についての語り方を内在化していくように思われる。感情経験について精緻化された会話を養育者としている子どもは、組織化された自己概念をもち、自尊感情も高かったことが見出されている（Reese et al., 2007, 2010）。自身の感情語りは、自伝的記憶の重要な構成要素であり、時間的に拡張された自己（Neisser, 1988）を構築するための適切な材料となると考えられる。それはひいては他者を、時間的に拡張された存在として理解することへの道を開くものともなろう。

渡辺 弥生 「児童の感情リテラシーは教育しうるか。」

発達臨床の視点からすると、子どもたちのいじめや不登校等の問題行動の背景には、対人関係の問題や自尊心の低さが指摘されてきた。こうした原因の一つに、親や教師が子どもの問題行動を性格のせいにし、子どもの視点からすると内的で統制できない原因として帰属するよう追いつめてきた感がある。こうした状況を改善するため、問題の原因をソーシャルスキルの不足あるいは未熟さ由と捉え、支援のしかたで問題を予防できるのではないかと学校予防教育が提唱されつつある（山崎・戸田・渡辺, 2013）。1990年代以降の感情知能（Goleman, 1995; Mayor & Salovey, 1997）や感情コンピテンス（Saarni, 2007）の影響から、ソーシャルに本来含まれるかもしれない「感情」の発達が人格形成において最重要なものとして認知されるようになった。近年、ソーシャル・エモーショナル・ラーニングと称するアプローチが欧米で子どもの教育現場に導入されるようになり、社会性と感情の発達が学力にも影響することがエビデンスとして報告されている（Lemerise & Arsenio, 2007）。すなわち、社会性や感情の発達が不十分であると、教師や仲間との関係がうまくいかず、結果として、各教科や学校生活に必要なコミュニケーション不全の状況となり、児童期以降の学力が低下するという指摘である。そのため、感情面を含めた支援が必要と考えられるが、支援するためには、まず、感情がどのように発達するのかという実態を解明することが必要である。

そのため、支援可能なイメージをもてるように、「感情リテラシー」と捉え、感情のボキャブラリーの獲得、自己覚知（自分の気持ちに気づく）、他者覚知や感情のマネジメント（コントロール）の発達、ソーシャルスキルとの関連、といった領域に分け、感情リテラシー

の発達のアウトラインを明らかにしようとする動きが始まっている(渡辺,2011)。児童期の感情リテラシーの発達（表現や理解のしかた、感情の強弱や複数の感情の認識、マネジメントの方法の理解など）について、未だ少ないながら解明されつつある。さらに、ゲーム型の教育ツールを用いて、感情やソーシャルスキルを客観的にアセスメントする可能性が示唆されている。仮想的な状況における問題解決の経験自体が、感情のリテラシーやソーシャルスキルを学ぶ意欲を高める機会ともなり（Craig, DeRosier,& Watanabe, 2015）、感情についての基礎研究を応用領域へ活かす方向性が期待される。

シンポジウム 2 「感情の脳科学」

6月14日（日） 大会 2 日目 13:00～15:00 7 番教室

企画：日本感情心理学会第 23 回大会準備委員会

司会：永房典之（新渡戸文化短期大学）

話題提供者： 石田裕昭（東京都医学総合研究所）

「他者の感覚・情動を推測する脳メカニズム」

日道俊之（京都大学・日本学術振興会）

「共感における遺伝的要因の影響メカニズムの検討：

イメージング・ジェネティクス的研究から」

高橋英彦（京都大学）

「社会的情動の認知神経科学と精神科臨床との接点」

指定討論者： 大平英樹（名古屋大学）

1. 企画主旨

感情に関わる脳のメカニズムについて、神経科学・医学・生理学・心理学など、学際的な科学的見地から最新の研究経過を踏まえ、社会的動物と呼ばれるヒトや同じ霊長類であるサルを対象とした広義での“社会性”、感情について議論を行う。

本大会企画では、脳、神経科学に関する研究を行っている 3 者を迎え、感情、社会性についての議論を試みる。指定討論者には、心理学における脳研究、神経科学研究アプローチのパイオニアであり、感情研究者である大平英樹氏を迎える。

2. 話題提供者の要旨

石田 裕昭 「他者の感覚・情動を推測する脳メカニズム」

不安な気持ちや体の痛みは、他者にそっと手を添えられると和ぐことがある。このとき安心や心地良さを感じているのは撫でられた側だけではない。手を添え、撫でる側も手の動作を通じて相手と同様に安心感や心地良さを共有している。肌の触れ合い（タッチング）を通じて、なぜポジティブな情動は生じ、共有されるのか？ Rizzolatti らの研究グループは、サルが手の動作をするときと、相手の手の動作を見た時に反応するニューロン（ミラーニューロン）をサルの腹側運動前野から発見し、これが他者の動作の意図を推測するコミュニケーションだけでなく、情動の共感にも関わると主張した。手の動作に関わる視覚運動ニューロンが、どのように他者の情動の推測に関わるかを示した実証的な証拠はないが、腹側運動前野-島皮質-下頭頂小葉の神経ネットワークが重要であると考えられる。我々は、

他者の体性感覚を推測する神経基盤について調べ、サル頭頂葉連合野の多種感覚ニューロンが、他者の身体上に与えられた触覚刺激を自己（サル）が観察したときにも反応することを発見した。一方、頭頂葉と密接に結びついている島皮質の後部は、ヒトにおいて、ゆっくり優しく肌を撫でられ心地良さを感じているとき特異的に反応することが示されている。さらに、マウスを用いた分子生理学的な研究では、優しく撫でられる触覚刺激に選択的に反応する末梢神経繊維の存在が確認されている。したがって、島皮質は、身体感覚と情動を統合する脳領域であると考えられる。では、個体同士で親和的にグルーミングを行うサルの島皮質のニューロンは、身体を撫でられた他者がポジティブな情動を得ている様子を、自己（サル）が観察したときに反応するだろうか？こうした観点から最新の研究成果を紹介しながら、マカクサルを用いた神経解剖と電気生理学実験の成果を中心に、腹側運動前野-島皮質-下頭頂小葉の神経ネットワークと社会的認知の関わりについて議論したい。

日道 俊之（京都大学・日本学術振興会） 「共感における遺伝的要因の影響メカニズムの検討：イメージング・ジェネティクス的研究から」

共感は、他者との感情共有（感情的共感）や他者の心的状態に対する推論（認知的共感）から構成され、他者理解や他者援助を促進する(de Waal, 2012; Decety & Svetlova, 2012)。このような共感の個人差に、環境的要因だけではなく遺伝的要因も影響することが、行動遺伝学的研究から示されている(Knafo et al., 2009; Rushton et al., 1986)。近年、一つの塩基配列の違いを解析する一塩基多型解析を用いた研究から、どの遺伝子多型が共感の個人差に影響するのかという点が明らかになりつつある。しかし、共感は様々な要素から構成される複合的な概念であるため、ある遺伝子多型が共感のどの要素に影響しているかという影響過程の詳細に関して、1つの遺伝子多型と行動の対応のみから理解することは困難である。遺伝的要因は、神経伝達物質、脳への影響を介して行動に影響する。よって、共感の遺伝的要因の影響メカニズムを理解するためには、一塩基多型解析及び脳機能イメージングを組み合わせたイメージング・ジェネティクス(imaging genetics; Hariri & Weinberger, 2003)的研究が重要である。このような研究アプローチにより、遺伝的要因が共感の神経基盤への影響を介して行動に影響する過程を検討することが可能となり、共感の遺伝的要因の影響メカニズムを、神経・行動との連関をもとに理解することが可能となる。

共感に関連する脳領域のひとつとして、前頭前野外側部(lateral prefrontal cortex)がある(Engen & Singer, 2013)。前頭前野外側部は感情調整を介して感情的共感に関連すること(Lamm et al., 2010; Nomura et al., 2010)、自己の視点情報の抑制を介して認知的共感に関連すること(van der Meer et al., 2011)が示されている。本発表は、セロトニン・オキシトシン神経系に関する遺伝子多型(セロトニン 2A 受容体遺伝子多型, オキシトシン受容体遺伝子多型)に対する一塩基多型解析, 及び近赤外分光法(NIRS: near-infrared spectroscopy)による

前頭前野外側部活動の測定を組み合わせた2つの研究を紹介し、共感のメカニズムに関して遺伝・脳機能・行動の連関から考察することを試みる。

高橋 英彦（京都大学） 「社会的情動の認知神経科学と精神科臨床との接点」

社会的行動に深く関わる情動、意思決定、意識など従来、脳神経科学が不得意としてきて、むしろ心理、経済、哲学などの人文・社会領域が扱ってきた研究対象が、脳情報の計測技術や認知・心理パラダイムの進歩により、脳神経科学の重要なテーマになり、社会脳、社会神経科学として近年、興隆してきた。精神疾患は、定義上、社会生活に支障をきたす状態を疾患あるいは病的状態として加療の対象としている以上、全ての疾患や病態が社会認知や社会的行動の障害を伴っていると言っても過言ではない。そういった観点から演者は functional MRI や positron emission tomography (PET) といった脳画像の手法を用いて、健常者並びに精神疾患患者の社会的行動の神経基盤を検討してきた。社会的行動に大きな影響を与える情動の中でも喜怒哀楽といった比較的基本的な情動を対象とした研究はこれまでも広くなされてきたが、より高次で対人的な場面で重要となってくる社会的情動(罪責感、羞恥心、誇り、妬み、嫉妬)の神経基盤に関する脳画像の研究を我々の結果を中心に紹介する。また、そのような感情が過剰であったり、減弱した状態について、精神科臨床の立場から概説する。

一般研究発表

6月13日（土） 大会初日 口頭発表①

OS01. 文化的自己観は感情認識の明瞭性と関連するか ―内受容感覚を媒介として―

金井雅仁（筑波大学大学院人間総合科学研究科・日本学術振興会）

湯川進太郎（筑波大学人間系）

本研究では、相互独立性が高い個人は感情の認識が明瞭であり、相互協調性が高い個人は感情の認識が不明瞭であろうという仮説を検討した。さらに、その関係性が内受容感覚の敏感さによって媒介されるかを検討した。その結果、相互独立性は感情認識の明瞭性と正の関連を示し、相互協調性は負の関連を示した。さらに、相互協調性と感情認識の明瞭性の関係が内受容感覚の敏感さによって媒介された。

OS02. 感情推測の正確さ ―個人内変動と個人間変動に着目した検討―

藤原 健（大阪経済大学人間科学部）

本研究の目的は、感情推測の正確さについて、個人内変動を捉える正確さと個人間変動を捉える正確さという二つの側面から検討することである。顔表情データベース（DB99; ATR）より選んだ男女4名ずつの表情刺激について、男女大学生62名が「喜び」「悲しみ」「驚き」「怒り」「嫌悪」「恐れ」「軽蔑」を7件法で評定した。その結果、二つの正確さの相関は中程度以下に留まり、両者を別のものとして仮定する必要性が示唆された。

OS03. 動画および静止画表情刺激データベースの構築

藤村友美（産業技術総合研究所人間情報研究部門）

長谷川良平[#]（産業技術総合研究所人間情報研究部門）

本研究では、感情研究で広く使用される表情刺激データベースの構築を目指し、表情に対する予備的評価実験を行った。表情刺激は、演技経験者の日本人の男女各4名ずつの9種類の表情（興奮、喜び、リラックス、眠気、悲しみ、嫌悪、怒り、恐れ、驚き）で構成されていた。各表情について、何も感情を表出していない中立の表情から、感情を最大に表出した表情までの動画表情を切り出し、動画像の最後のフレームを静止画表情とした。

OS04. 侵入頻度が高いネガティブな記憶の特徴

—大学生に適した筆記表現法の作成に向けた予備調査—

小川 将（中央大学大学院）

兵藤宗吉（中央大学文学部）

筆記表現法は人々が自己の心理学的問題に対処するためのユビキタスな心理療法である(余語, 2007)。筆記表現法の効果は一貫した結果が得られていないが, 侵入思考得点が高い参加者を対象とした研究では効果がみられており, 侵入思考頻度と介入効果の関連性が示唆される。本研究では筆記表現法がより効果的な介入となる対象者の選別を目的とし, 大学生のネガティブな記憶に対する侵入頻度の程度やその特徴を検討すべく調査を行った。

OS05. 鉄道運転シミュレータにおける運転中の感情の変化

和田一成（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

田所和孝[#]（西日本旅客鉄道株式会社）

上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

列車運転中の運転士の心理状態に影響を及ぼすものとして、停止精度や旅客数などの要因が考えられるが、本研究では、運転の時間設定がどのように影響するかを検討した。実験では、時間設定のみが異なる行路を7回運転させ、それぞれの行路が終了するたびにPOMSを用いて運転中の情動を評定させた。その結果、基準の時間設定におけるTMDが最も低く、これより短くても長くてもTMDが上昇し、時間による情動の変化が示された。

6月13日(土) 大会初日 口頭発表②

OS06. 感謝表出が表出者の印象に及ぼす影響

—被表出者は表出者のことをどう思うのか—

蔵永 瞳 (就実短期大学幼児教育学科)

樋口匡貴 (上智大学総合人間科学部)

福田哲也 (上智大学総合人間科学部)

他者から助けられたとき、感謝の気持ちを表出するかどうかによって印象が異なるのか、実験によって検討を行った。具体的には、他者から助けられたときの反応として、感謝表出、会話のみ、無反応の3条件を設け、それらの水準間で印象に違いがあるのか検討した。その結果、感謝を表出する方が無反応であるよりも、良い人、素敵な人、好感が持てる、というようにポジティブな印象が得られることが示された。

OS07. 家族愛を描いた映像に対する感動が家族への態度に及ぼす影響

加藤樹里 (一橋大学大学院)

村田光二 (一橋大学大学院)

感動が生じる一つの要因は、対象に価値を見出すことである。価値を見出した影響として、例えば家族愛という価値を描いた映像に感動すると、家族への態度がポジティブに変化すると考えられる。とくにその変化は、あまり家族を重視していない人でより大きいだろう。本研究では大学生に家族愛を描いた映像を視聴してもらい、その前後に家族への態度を潜在 (IAT)・顕在 (家族価値観尺度) の両指標を用いて測定し、態度変化を検討した。

OS08. 羞恥表出の謝罪機能に関する検討

福田哲也 (上智大学総合人間科学部)

本研究は、羞恥表出が謝罪として機能するのかを検討した。参加者には、遅刻した友人が羞恥表情あるいは無表情を示したシナリオのいずれかを呈示し、怒り感情や許せる程度、攻撃行動について尋ねた。その結果、羞恥表情を示した友人は無表情の友人よりも参加者の怒りを抑制し、許されていたが、攻撃行動には表情間に違いが見られなかった。この結果は、羞恥表出が認知・感情レベルにおいては謝罪として機能することを示唆している。

OS09. 韓国人大学生における顕在的・潜在的自尊感情の不一致と心理的適応の関連

—不一致の「大きさ」と「方向」に注目して—

藤井 勉 (Sungshin Women's University)

従来の顕在的・潜在的自尊感情の不一致を扱う研究は、個人内の「不一致の大きさ」や「不一致の方向」を含めていない。本研究はこの点に注目し、101名の韓国人女子大生を対象に検討を行った。収集した3変数の全てに共通して、不一致の方向の影響が見出された。顕在的自尊感情に比して潜在的自尊感情が高いほどネガティブ感情が高く、ポジティブ感情は低かった。また、抑うつを対象にした分析では、両者の交互作用も検出された。

OS10. 罪悪感は本当に謝罪を促進するのか？

八木彩乃 (神戸大学大学院人文学研究科)

大坪庸介 (神戸大学大学院人文学研究科)

罪悪感は、加害者による謝罪を促す重要な至近要因とされている。しかし従来の研究は、特性レベルで罪悪感傾向と謝罪傾向の関連を検討するものや、架空の場面での謝罪意思を測定するものが多く、行動レベルでの謝罪を扱っていなかった。また、行動指標をとっている研究でも、実験手続き上選択肢が与えられており、要求特性の可能性を排除できていなかった。本研究では、罪悪感が自発的な謝罪の至近要因となるかを検討する。

OS11. なぜ不公正者の不幸を喜んでしまうのか？

サンクション行動傾向とシャーデンフロイデの関連

石井辰典 (東京成徳大学応用心理学部)

澤田匡人 (宇都宮大学教育学部)

本研究では、シャーデンフロイデの予測因として“公正”に着目した。公正（もしくは不公正）に振る舞う他者が自分の不注意から不幸に見舞われるというシナリオを呈示したところ、参加者は不公正者の不幸に対してより強くシャーデンフロイデを感じると報告した。また、特性としてサンクション行動をする傾向が高い人ほど、不公正者の不幸を喜びやすいことも明らかとなり、サンクションとシャーデンフロイデの関連が示唆された。

6月14日(日) 大会2日目 口頭発表③

OS12. 連続した負け体験は結果の重要性を高める —事象関連電位を用いて—

亀井誠生 (立命館大学スポーツ健康科学研究科)

佐久間春夫[#] (立命館大学スポーツ健康科学部)

調子は、直前の成功が直後の成功確率を高める現象 Hot Hand として関心を集める。本研究では、感情と Hot Hand に着目し、期待値の異なる環境において喚起される感情について検証した。連続した勝利または敗北体験が、その場の感情状態に基づく成果の認識に及ぼす影響について明らかにすることを企図した。脳波の主成分分析から、連続した敗北に伴う不快感情は、結果への期待・評価を高めることを明らかにした。

OS13. 恐怖はどこへ行った？ —逆行阻止の生起メカニズムに関する実験的検討—

沼田恵太郎 (大阪大学大学院人間科学研究科)

条件づけと高次認知の関連は学習研究の興味の一つである。本研究では結果の加算性の教示により逆行阻止の生起が調整されるか否かを検討した。条件刺激は PC 上の図形で、無条件刺激は手首への電撃であった。独立変数は教示の有無で、従属変数は電撃予期と皮膚電気活動の変化量 (ΔSCL) であった。その結果、教示群で2つの指標で逆行阻止がみられ、非教示群で逆行阻止はみられなかった。この事実は条件づけの背景で推論などの情報処理がなされたことを示唆する。

OS14. 不快感情の制御困難性に関する知覚制御理論的考察

金築 優 (法政大学現代福祉学部臨床心理学科)

金築智美[#] (東京電機大学工学部人間科学系列)

不安や怒りといった不快感情が制御困難になると、心理臨床上の問題が生じやすい。本発表では、不快感情の制御困難性について、知覚制御理論 (Powers, 1973/2005) の観点から考察する。人を制御システムと見なす知覚制御理論は、制御システム間の葛藤こそが問題であると捉える。知覚制御理論における感情の機能 (金築, 2013) を踏まえ、「不快感情の制御困難性は、葛藤の現れである」という仮説を論じる。

OS15. 音楽による鳥肌感と涙感の同時生起がもたらす自律神経活動の多重変化

森 数馬（慶應義塾大学先導研究センター）

岩永 誠（広島大学大学院総合科学研究科）

音楽によって稀に強烈な情動が喚起されることがある。こうした情動である鳥肌感と涙感は、それぞれ異なる自律神経活動をもたらすことが示唆されてきた。本研究では、鳥肌感と涙感が同時に生起した前後 15 秒間の心拍・呼吸・皮膚電気活動を検討した。実験の結果、同時生起に伴って皮膚伝導反応が上昇し、その数秒後に呼吸が深く・遅くなっていた。ここから、交感神経が活性化された後すぐに副交感神経が活性化された可能性がある。

OS16. 事前の特別な呼吸法が心拍変動に及ぼす影響

上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

和田一成（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

臼井伸之介[#]（大阪大学大学院人間科学研究科）

我々の先行研究では、呼吸再訓練法と呼ばれる呼吸法を事前を実施すると、実施しない場合と比較して、その後の作業がある程度迅速で思慮深い行動をとるようになることが示された。このメカニズムを解明すべく、今回は作業中の心拍変動分析を行った。その結果、事前に呼吸法を実施してから作業を開始すると、実施しない場合と比較して、LF/HF も HF も増大し、交感神経、副交感神経共に亢進することがわかった。

6月13日(土) 大会初日 ポスター発表①

PS01. 怒りと不安がポジティブ／ネガティブ事象の生起確率の推定に及ぼす影響について

佐藤重隆（東洋大学大学院）

戸梶亜紀彦（東洋大学社会学部社会心理学科）

怒りと不安がポジティブまたはネガティブな事象の生起確率の推定に及ぼす影響について、実験的感情誘導を用いて検討を行った。大学生 53 人（男性 17 名、女性 36 名）に対して、怒りまたは不安感情が喚起される場面のシナリオに関するインタビューによって感情誘導を行った後、ポジティブまたはネガティブな出来事
の生起確率を推定させた。その結果、怒り感情条件の参加者の方がポジティブな出来事の起こる確率を高く推定した。

PS02. 不快感情に対するプロテクティブ・フレームの効果検証

岩城達也（広島国際大学）

谷脇佑太郎[#]（広島国際大学）

嵩原広宙[#]（広島国際大学）

不快刺激のもつ不快要素を低減するプロテクティブ・フレームを設けると、不快刺激がもたらす興奮だけを取り出し楽しめるようになる。今回の実験では、映画や動画作品から、1) 恐怖または嫌悪感情を喚起し、また 2) 映像内容が現実的
また非現実的なものを選出して参加者に提示した。映像が非現実的な内容であることがプロテクティブ・フレームとして作用するかを主観及び生理指標から検討したところ、これを支持する結果が得られた。

PS03. 繰り返し想起される不快エピソードの機能

神谷俊次（名城大学人間学部）

ちょっとしたことをきっかけにして、よみがえってくる個人的経験の記憶（不随意記憶）には、どのような機能があるのでしょうか。参加者に「日常生活において、ふっとよみがえってくる過去のエピソードで、繰り返し想起しているものを 3 つまで記述することを求めた。記述内容を分析した結果、感情的に快あるいは中立なエピソードに比べると、不快エピソードでは、思考や行動を方向づける教訓的性質をもつエピソードが多かった。

PS04. 罪悪感操作における罪悪感と恥感情の生起に関するメタ分析

古川善也（広島大学大学院教育学研究科教育人間科学専攻）

中島健一郎[#]（広島大学大学院教育学研究科）

森永康子[#]（広島大学大学院教育学研究科）

罪悪感と恥は、どちらもネガティブな出来事の原因を自己に帰属することで喚起する感情である。罪悪感を実験的に操作する際に、罪悪感が高まると同時に、しばしば恥感情も操作によって高まる。この感情の同時生起についてメタ分析を通じて、過去 10 年間の研究を対象に感情の実験操作と罪悪感、恥感情の生起との関連の検討を試みた。

PS05. 嫌いなヤツは助けたくない ―対人嫌悪と援助傾向の関係―

河野和明（東海学園大学人文学部心理学科）

羽成隆司（椋山女学園大学文化情報学部）

伊藤君男（東海学園大学人文学部心理学科）

対人嫌悪は良好な互恵的関係を形成できない相手に対して発動され、援助行動を抑制するように作用していると考えられる。本研究において、知人および最も嫌いな他者について援助傾向を測定した結果、両対象者への嫌悪感には援助傾向と負の相関が、一方、両対象者へのポジティブ感情には援助傾向と正の相関が認められた。また、援助傾向に影響する要因として、回答者および対象者の性、嫌悪の理由、嫌悪的認知の内容が分析された。

PS06. 妬み喚起場面と妬みの種類

浅川萌生（筑波大学大学院人間総合科学研究科心理専攻）

望月 聡（筑波大学人間系）

本研究の目的は、大学生における妬み喚起場面と妬みの種類について検討することであった。まず大学生が過去に妬みを感じた場면을調査し、妬みやすい領域を選定した。妬みは悪意・敵意の有無で悪性・良性に分化されるという知見のもと、妬みの種類を分ける要因を検証したところ、妬み喚起場面の領域によって領域重要度の高低が影響していることが示された。自意識・他者意識と妬みの種類の間には関連がみられなかった。

PS07. 児童の情動知能に関する教師と児童の認識

—感情表現が苦手な児童はそのことを自覚しているのか—

山田洋平（梅光学院大学子ども学部）

近年、社会性と情動の学習などの心理教育プログラムでは、情動知能の育成を含めた活動が実施されるようになってきた。その背景には、子どもの情動知能の未熟さがあると言われている。では、この情動知能の未熟さについて、児童自身はどのように認識しているのでしょうか。本研究では、教師から見た児童の情動知能と児童本人から見た自己の情動知能の認識にどのようなずれが生じているのかを検討することを目的とした。

PS08. 高齢者の信頼性判断は外見の影響を受け続ける

鈴木敦命（名古屋大学環境学研究科）

本研究では、投資を模したゲームを通じて信頼できる人物と信頼できない人物の区別を学習する課題のパフォーマンスを若年者と高齢者の間で比較した。その結果、若年者はゲームが進むにつれて信頼できる人物に投資するようになる一方、高齢者は信頼できそうな顔の人物に投資を続けることが明らかになった。一般に詐欺犯罪者は信頼できそうな外見を装うと考えられるため、こうした高齢者の傾向は詐欺への脆弱性を高める恐れがある。

PS09. 子どもの表情変化に対する認知と情動反応

中田 栄（帝京大学）

本研究は子どもの表情の変化の過程をモーフィング画像を提示し、検討していくことを目的とする。3歳から4歳の幼児36名(男児18名,女児18名)に無表情から笑顔への変化、無表情から怒りへの変化をランダムに提示し、子どもの反応(笑顔、繰り返し見たがる, 興味, 恐れ)について検討した。その結果、笑顔への変化への注視がみられ、繰り返し見たがる反応がみられた。一方、怒りの表情変化に対して恐れを示した子どもは注視がみられず、回避する反応が示された。

PS10. 児童期後期における規則・対人場面の役割取得能力とクラス内行動、
学校肯定感・回避感の関係

本間優子（新潟青稜大学）

内山伊知郎（同志社大学）

本研究では役割取得能力（規則および対人場面）、教師評定によるクラス内行動（授業不参加行動、規則遵守行動、他者配慮行動）、児童評定による学校肯定感・回避感の関連について検討を行った。役割取得能力の発達段階（段階1を低群、段階2を高群）と各々の変数についてT検定を行った。対人場面の役割取得能力では他者配慮行動得点に有意な差が示された。規則場面の役割取得能力についてはいずれの変数も差が認められなかった。

PS11. 青年期のアレキシサイミア傾向の検討

反中亜弓（瀬戸少年院）

寺井堅祐[#]（福井赤十字病院）

梅沢章男[#]（放送大学福井学習センター）

中学生を対象に青年期用アレキシサイミア尺度が作成され、アレキシサイミア傾向の性差及び学年差が検討されている（反中・寺井・梅沢，2014）。しかし、その差が一時的なものか発達によるものかは明らかにできていない。よって、本研究では中学生から大学生に調査を実施し、アレキシサイミア傾向について検討することとした。中学生、高校生及び大学生のそれぞれに確認的因子分析を施したところ、共通して3因子構造が安定していた。

PS12. 協調的なメール交換過程における顔文字の返報性規範の影響

山本恭子（神戸学院大学）

木村昌紀（神戸女学院大学）

本研究は、通常に対等なメール交換過程における顔文字の返報性が対人感情に及ぼす影響を検討した。友人との待ち合わせ場面のメール交換では、返報性の規範に反する顔文字の欠如が、ポジティブ感情の低減とネガティブ感情の増幅につながっていた。この結果は、木村・山本（2014）の謝罪受容状況と類似する一方で被拒否状況とは異なっていた。協調的なメール交換過程の特徴として、返報性の規範の影響が強くなることが示唆された。

PS13. 無表情の感情価 —既知条件と未知条件の比較—

柴田利男（北星学園大学社会福祉学部）

Russell（1980）の円環モデルに基づいて表情写真を用いた表情認知実験を行い、既知人物の場合、未知人物の場合、および無表情写真の布置について比較検討した。無表情を含む8つの表情写真について対比較によって非類似度行列を作成し、MDSによって2次元平面に布置した。その結果、表情の布置に既知か未知かは影響しなかった。無表情については既知条件でのみ性差がみられた。

PS14. 快感情・不快感情の喚起に適した映像刺激の検討

高田琢弘（筑波大学大学院人間総合科学研究科・日本学術振興会）

湯川進太郎（筑波大学人間系）

本研究では、感情状態が“快—不快”次元と“活性—不活性”次元の二次元で構成されるという、次元説に基づき、27種類の映像を用意し、快・中性・不快の各感情の喚起に適した映像を検討することを目的とした。実験参加者は大学生・大学院生31名であり、一人あたり九種類の映像を視聴させた。各映像の視聴後に、Affect Grid上で感情状態を評定させ、六つの感情（例：嫌悪、驚き）がどの程度当てはまるかについて回答を求めた。

PS15. 感情連想語における Zipf の法則

竹原卓真（同志社大学）

鈴木直人（同志社大学）

本研究では、感情連想語の出現頻度分布においてスケーリング則が出現するかどうかを検証した。1400人以上の参加者を対象にして、喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・恐怖・驚き・リラックス・穏やかさ・興奮という9つの手がかり語から連想される名詞の単語を個別に書かせた。その結果、それらの感情連想語の出現頻度分布は傾きが約-1のべき乗分布となり、スケール不変性を有する Zipf の法則に従うことが明らかとなった。

PS16. 表情の情動認知の正確さ得点算出の試み

—自記式尺度との基準関連妥当性の検討—

松尾和弥（甲南大学大学院）

福井義一（甲南大学文学部）

本研究では、表情の情動認知課題で得られたデータを分析のために集約することを試みた。表情の情動認知課題のデータを集約した変数として表情の情動認知の正確さ得点を考案し、研究1では社会的スキルとの関連を検討した。しかし、有意な相関が得られなかったため、研究2では研究1の問題点を修正しつつ、多次元共感性との関連を検討した。その結果、有意な相関が得られ、表情の情動認知の正確さ得点の有用性が示唆された。

PS17. 感情価と覚醒度に基づく刺激語の作成

木村年晶（同志社大学 こころの科学研究センター）

鈴木直人（同志社大学心理学部）

本研究の目的は感情を喚起する刺激語を感情価と覚醒度に基づき作成することであった。大学生 86 名を対象に質問紙調査を行った。質問紙は ANEW(Bradley & Lang, 1999)から抽出された 270 個の単語を日本語に翻訳し、感情価（快—不快, 9 件法）及び覚醒度（ぼんやり—はっきり, 9 件法）を評価してもらった。各語を標準化した上で、感情価と覚醒度の 2 軸上にプロットし、9 つのカテゴリーからなる 135 語の刺激語を作成した。

PS18. ネガティブではない感情による泣き：何歳頃、どのような状況で生じるのか

和田由美子（九州ルーテル学院大学人文学部）

吉田ゆう美[#]（九州ルーテル学院大学人文学部）

幸福や感動等、ネガティブではない感情によって生じる「泣き」が何歳頃、どのような状況で生じるのかについて、質問紙の自由記述と面接法による調査を行った。「ネガティブではない泣きの一番古い記憶」について、詳細な状況説明が得られたのは 55 エピソードで、当時の平均年齢は 13 歳(6-20 歳)であった。48 エピソードはネガティブ状況の好転と関連しており、残り 7 はサプライズ、音楽への感動等に関するものであった。

PS19. 社会人におけるレジリエンスについて —雇用形態と性別による相違の検討—

戸梶亜紀彦（東洋大学）

若年労働者の早期離職が問題視される中、その原因の一端にレジリエンスの低さが関連しているのではないかと考え、これまで検討を行ってきた。本研究では、18～34歳までの社会人を対象に、雇用形態の違い（正社員、契約社員、フルタイムのアルバイト・パート社員）と性別がレジリエンスの高低と何らかの関連があるのかについてネット調査に基づいて検討を行った。分析の結果、雇用形態の違いでレジリエンスの程度に差が見出された。

PS20. マグレガー理論の“底流”について —論文「労働組合と経営者の協働」を中心に—

村田晋也（愛媛大学）

近年、目標管理なるシステムが、企業に組み込まれつつある。これは、経営学の教科書等をみると、D. マグレガーにより提案された概念とされている。しかし、このマグレガーの主張と目標管理理論との関連性について言えば、いつもその上述の一言が記載されるに終始し、その中身まで詳述される事はない。そこで本稿では、彼の理論形成の一基盤をなしたと考えられる1942年論文を取り上げ、両者の関連性を比較・考察する事を目的とする。

6月14日(日) 大会2日目 ポスター発表②

PS21. 被害者としての店舗の万引き犯に対する感情の検討

大久保智生 (香川大学教育学部)

本研究の目的は、被害者としての店舗の万引き犯に対する感情について検討することであった。調査の結果、万引き犯に対する感情について「否定的感情」と「同情」の2因子が抽出され、これらは防犯対策や対策への意識と関連していた。

PS22. 大学生の協同作業に対する認識と情動知能との関連

橋本由里 (島根県立大学看護学部)

平井由佳[#] (島根県立大学看護学部)

飯塚雄一[#] (島根県立大学短期大学部)

大学生における協同認識と情動知能との関連について調べた。「協同効用」と「自己対応」、「対人対応」との間に正の相関が、「個人志向」、「互恵懸念」と「対人対応」の間に負の相関が認められた。「協同効用」と「自己動機づけ」、「共感性」、「愛他心」との間に正の相関が、「個人志向」と「共感性」、「愛他心」との間に負の相関が認められた。また、「互恵懸念」と「共感性」、「愛他心」との間に負の相関が認められた。

PS23. 看護師の感情と他者とのかかわりの内容に関する研究

—Study on the involvement with others person of nurses—

石井慎一郎 (自治医科大学看護学部)

本研究の目的は、看護師の感情と他者とのかかわりの内容との関係を明らかにすることである。郵送法により、臨床看護師47名を対象に感情指数(JWLEIS)及び他者から得ている支援の内容を調査した。分析の結果、感情指数と「家族や職場以外の他者との人間関係をうまく築けている」の間には正の相関が認められた($r=0.6, p<0.01$)。今後は、他者から得ている支援の内容と看護師の属性との関係を明らかにする。

PS24. 尊敬関連感情概念の階層的意味構造の再検討

武藤世良（東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会）

武藤（2014）の大学生の尊敬関連感情概念の知見がサンプルを変えても再現されるのかを検討した。20～70代の成人を対象とするweb調査により、武藤（2014）と同じ尊敬関連語18語を提示し、一対比較法による意味的類似性評定を求めた。階層的クラスター分析の結果、武藤（2014）の結果がほぼ再現され、敬愛・心酔・畏怖・感心・驚嘆の5つが現代日本人の尊敬関連感情の基本カテゴリーである可能性が示唆された。

PS25. 相手との将来を見据えて嘘をつく

—対人葛藤状況と関係性が利他的な嘘の利益とコストの想定に与える影響—

菊地史倫（公益財団法人鉄道総合技術研究所）

佐藤 拓（いわき明星大学教養学部）

真実をそのまま伝えると相手が傷つく可能性があるとき、人は嘘をつくことがある。このような潜在的な対人葛藤状況や相手との関係性が、利他的な嘘の利益とコストの想定に与える影響を検討した。その結果、状況や関係性によらず話し手は利他的な嘘の利益を想定しつつも、対人葛藤が激化しないと考える場合には、嘘のコストの想定が高まっていた。したがって、他者との将来を見据えて真実と嘘を使い分けていることが示唆された。

PS26. 対人場面における感情コミュニケーションのすれ違い度合いの検証

原邊祥弘（帝塚山学院大学人間科学部）

1対1の対人場面において、考えが正確に伝達されることは重要である。しかし、情報伝達においては必ずしも正確な情報が伝えられるとは限らず、認識のすれ違いが起きる。すれ違いを引き起こす原因の一つに情報伝達の誤差が考えられる。本研究では、1対1の対人場面において、感情情報の受け渡しが生じる際の誤差について発話者から予め感情の種類が伝えられている場合、その伝達にどの程度の誤差が生じるかを実験場面で検証した。

PS27. 面子喪失感に関する感情カテゴリーの検討 ―質問紙調査による日中比較―

林 萍萍（神戸大学国際文化研究科）

米谷 淳（神戸大学 大学教育推進機構）

面子は文化的普遍性と文化的特殊性という二つの側面を持つ。面子が潰されたとき、非常に辛い感情が生じる。中国人と日本人とでは、面子が潰されたときに感じる感情の種類にどのような違いがあるのか。中国人（131人）と日本人（61人）を対象に質問紙調査を行い、「面子が潰された」という言葉から連想されるすべての感情語を記述させた。分析の結果、中日間で共通した感情カテゴリーが得られた一方、中国人特有のものも得られ、感情の割合に文化差が認められた。

PS28. タイ人の怒りの誘因に関する面接調査

堀本美都子（神戸大学国際文化学研究科）

米谷 淳（神戸大学 大学教育推進機構）

本研究では、感情の社会構築論の立場からタイ人の怒りの誘因を検討した。20名のタイ人（男性12名、女性8名）を対象に半構造的な手法による面接調査を行った。面接調査によって得られた発話データを質的研究方法によって分析した。その結果、タイ人には目下の相手からの上下関係の侵害や、仏教や王室の冒瀆によって強度の怒りを感じる者がおり、怒りの誘因がタイ人の社会道徳的な価値観に裏付けられていることが示唆された。

PS29. 児童生徒の生活不安と怒り感情に関する国際比較研究

―日本と北欧諸国の児童生徒を対象にして

藤井義久（岩手大学教育学部）

日本864名、デンマーク305名、フィンランド275名、スウェーデン139名の児童生徒（10歳～15歳）を対象にして、児童生徒の生活不安と怒り感情に関する国際比較を行った。その結果、国を超えて一貫して、生活不安と怒り感情は密接に関連しており、特に「教師関係」において不安を感じている者ほど怒り水準が高いことがわかった。

PS30. 食物の色彩が視覚的な感性評価に与える影響

岩佐和典（就実大学）

本研究では、食物を見た際に生じる味や食感に関する感覚イメージ、好悪や食べたさといった感情的・動機づけの反応といった感性評価に、食物の色彩がどのように影響するか実験的に検討した。実験に際しては、まず特性の異なる数種の食物を撮影し、その色彩を編集することで、1種の食物につき複数の異なる色彩を持つ画像を作成した。本発表では、それらを実験刺激とした、一般大学生対象の感性評価実験の結果について報告する。

PS31. 腹式呼吸法の実施に伴う生理・心理的変動（1）：呼気の長さに関する実験的検討

高橋研人（東北文化学園大学院健康社会システム研究科）

佐藤俊彦（東北文化学園大学院健康社会システム研究科）

ストレス反応を緩和する技法として腹式呼吸法に着目し、呼気の長さが心拍数などの自律神経活動と主観的な気分の状態に及ぼす効果を検証した。腹式呼吸の呼気を2秒または6秒とする試行を1回ずつ行った。内田クレペリン精神検査の実施後、腹式呼吸を3分間実施した。測定前後の気分状態を質問紙により調べた。2秒の呼気を先に経験した群でのみ、最初の試行での腹式呼吸の際に、副交感神経活動に関連した指標が顕著に増加した。

PS32. 先行する認知的評価は後続する認知的感情制御の効果を調整するか

—短期縦断研究による検討

榎原良太（東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会）

従来、数多くの認知的感情制御方略について、種々の方略が、精神的健康へどのような影響を及ぼすかが検討されてきた。一方、近年、複数の論者により、方略の適応性は一意的には定まらず、それらが用いられる文脈的要因に規定されるという主張がなされ始めている。本研究では、状況に対する認知的評価が、後続する認知的感情制御の効果にどのような影響を及ぼすかについて、短期縦断研究による検討を行った。

PS33. ネガティブな出来事に対して用いる感情制御方略について

—悲しみ・怒りを感じた出来事への対処方法—

平井 花（学習院大学文学部心理学科）

本研究では、悲しみ・怒りの2種類のネガティブな出来事に対して用いる感情制御方略及び方略間の関係性について調査するため、自由記述式の質問紙調査を実施した。大学生157名（ $M = 19.78$ 歳）が質問紙に回答し、その結果、感情制御方略数の平均値は4.50個（ $range = 1-10$ ）、方略の下位分類は79カテゴリとなった。また分類された方略のカテゴリを用いてコレスポンデンス分析を行った結果、各方略間の関係性が示唆された。

PS34. ポジティブ感情の分化とその特徴

菅原大地（筑波大学人間総合科学研究科）

杉江 征[#]（筑波大学人間系心理学域）

ポジティブ感情の分化は不明確であることが指摘されている。また、ポジティブ感情体験の男女差に関する知見は非常に乏しい。以上の二つの問題点から、大学生166名にポジティブ感情語を快次元、活性次元の二次元で評定させることで、ポジティブ感情の分化と男女差を検討した。その結果、ポジティブ感情は快次元より、活性次元によって明瞭に区別されること、ポジティブ感情体験には男女差がみられることが明らかとなった。

PS35. 愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが共感性に及ぼす影響

—潜在連合テスト（IAT）を用いた検討—

大浦真一（甲南大学大学院人文科学研究科）

福井義一（甲南大学文学部）

本研究では、愛着の内的作業モデル（IWM）の顕在面（顕在不安・回避）について質問票を、潜在面（潜在不安・回避）についてIATを用いて測定し、IWMの顕在・潜在面が共感性に及ぼす影響について検討を行った。階層的重回帰分析を行った結果、共感性の視点取得に対して、潜在不安の有意な負の影響が見られた。潜在不安は対人ネガティブライフイベント（NLE）を予測すること（大浦ら、2014）から、視点取得の低さがNLEを招く可能性が示された。

PS36. ユーモアスタイルと生きがい感および幸福感との関連

一関祥佑（大正大学大学院人間学研究科臨床心理学専攻）

本研究は、大学生を対象に質問紙法を用いて、ユーモアスタイルと生きがい感および幸福感の関連について相関関係をとることによって検討した。分析の結果、ユーモアスタイルと幸福感との間においては、親和的ユーモアと達成感、自虐的ユーモアと人生に対する前向きな気持ち、自己高揚的ユーモアと自信および幸福感の合計の間に有意な相関が認められた。ユーモアスタイルと生きがい感の間においては有意な相関は認められなかった。

PS37. 感じ方の違うポジティブ感情を喚起する方法についての予備検討

木村健太（産業技術総合研究所自動車ヒューマンファクター
研究センター）

眞田和恵[#]（花王株式会社香料開発研究所）

門地（仙波）里絵（花王株式会社香料開発研究所）

近年、多様な種類のポジティブ感情が提案されている。本研究は、感じ方の違うポジティブ感情の喚起における映像刺激の有用性について検討した。実験では、興味、対人的好感情、親和、感動、安静を標的的感情として映像刺激を選定し、参加者に各映像の呈示直後に映像視聴中の感情状態について 30 項目の感情語への評定を求めた。本発表では、標的とするポジティブ感情の喚起における映像刺激の有用性について議論する。

PS38. 感動喚起が刺激の情報伝達に及ぼす影響

山本晶友（上智大学大学院総合人間科学研究科）

久保池香奈[#]（さいたま市役所）

樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）

本研究では、感動と情報伝達の関連について検討した。大学生 24 名が、感動喚起刺激として 6 話の漫画を読んだ後、自分の感情の強さ、漫画内容の評価、漫画内容の伝達意欲の強さを質問紙で回答した。自分の感情の強さと漫画内容の評価を説明変数、漫画内容の伝達意欲を目的変数とした分析の結果、伴う感情がポジティブかネガティブかによらず、感動、共通の話題性、面白さが伝達意欲を促進することが示唆された。

PS39. 依頼時における女性の笑顔表出の効果の検討

宮武沙苗（上智大学大学院総合人間科学研究科）

松下千紘[#]（株式会社マクロミル）

樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）

協力行動依頼時における女性の笑顔表出・身体的魅力・受け手の性別の影響について検討した。大学生 171 名に対し質問紙を用いた実験を行い、笑顔/真顔・身体的魅力高/低の女性に対する協力意欲を調査した。その結果、笑顔は真顔より協力意欲を高め、これは身体的魅力低条件でも見られた。更に受け手が男性の場合、協力時間も長くなる傾向が見られた。これらの結果から、女性の笑顔表出が協力行動への意欲を高めることが示唆された。

PS40. 笑顔による集団間バイアス是正効果の検討

樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）

野間孝太[#]（日本甜菜製糖株式会社）

笑顔の表出が集団間バイアスに及ぼす影響を検討した。大学生 143 名に対して最小条件集団パラダイムを用いた集団実験を行い、内集団/外集団に所属する笑顔/微笑/真顔の女性を対戦相手とした信頼ゲームを行わせた。その結果、真顔条件では対戦相手の所属集団によって提供額に差が見られたものの、微笑条件および笑顔条件では所属集団による提供額の差が消失した。これらの結果から、笑顔が持つ集団間バイアス是正効果が示唆された。

北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

http://www.kitaohji.com

振替 01050-4-2083

ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動

—その予防と改善の可能性— 吉澤寛之・大西彩子・G. ジニ・吉田俊和編著 A5・280頁・本体3000円＋税 攻撃行動、いじめ、少年非行など反社会的行動を行う者の「認知のゆがみ」に焦点を当てる。社会・教育・発達といった心理学領域に脳科学も含めて、先行研究を網羅的に概観。修正と予防の手掛かりとなる国内外の実践研究も紹介。

ふと浮かぶ記憶と思考の心理学

—無意図的な心的活動の基礎と臨床— 関口貴裕・森田泰介・両宮有里編著 A5・248頁・本体3000円＋税 無意図的想起やマインドワンダリング、洞察問題解決、思考抑制の皮肉過程、反すう、侵入想起など、自らの意志と無関係に意識に上る無意図的な心の働きにいち早く注目し、主に認知・臨床心理学から果敢に挑む。

モラルの心理学

—理論・研究・道徳教育の実践— 有光興記・藤澤文編著 A5・288頁・本体2500円＋税 道徳の教科化の流れのなか、幼小期から成人までの発達段階に応じた働きかけや、発達症等の扱われることが少なかった対象への実践も紹介。教育中心の従来研究だけではなく、神経科学や利他的行動に注目した進化心理学等の最新知見まで、幅広く理論と実践を論じる。

M-plusとRによる構造方程式モデリング入門

小杉考司・清水裕士編著 A5・332頁・本体2500円＋税 M-plusは安価でありながらも、非常に高度な統計処理を簡単なコーディングで行うことができる。無償のフリーソフトRは、強力な統計のプラットフォームとして浸透している。本書は、両ソフトの操作およびコマンド記述の違いを比較しつつ、SEMの分析の実際を解説する。

嫌悪とその関連障害

—理論・アセスメント・臨床的示唆— B. O. オラタンジ・D. マッケイ編著 堀越 勝監修・今田純雄・岩佐和典監訳 A5・340頁・本体3600円＋税 「嫌悪」という情動は、強迫性障害や動物恐怖症等の精神疾患を理解する上で、欠かせない要素でもある。本書は、その基礎研究から、精神疾患との関係、治療に関する研究まで、網羅的に解説。

思考と推論

—理性・判断・意思決定の心理学— K. マンクテロウ著 服部雅史・山 祐嗣監訳 A5・396頁・本体4000円＋税 現代的な思考心理学では、確率的説明が重要な位置を占める。その理解に必要な確率判断を解説。論理ベースでの発展に続き、二重過程理論やプロスペクト理論等の確率に基づく説明に至る。感情や合理性の影響がもたらす複雑さにも踏み込む。

0・1・2歳児の 子育てと保育に活かす マザリーズの理論と実践

内山伊知郎監修・児玉珠美・上野萌子編著 A5・168頁・本体2000円＋税 子どもを自然と引き寄せる語りかけ、「マザリーズ」。その効果と関連する理論を、保育・心理・教育・音楽の専門家が解説。子育てや保育の実践で活かせる具体的なレッスン法も紹介。乳幼児とのコミュニケーションに不安を感じる養育者、子ども・子育て支援に携わる関係者に好適。

Rによる心理学研究法入門

山田剛史編著 A5・272頁・本体2700円＋税 「心理学研究モデル論文集」「具体例に即した心理学研究入門書」「統計ソフトRの分析事例編」の3つの顔を持つテキスト。実際の研究例をもとに、研究法の基礎の紹介、研究計画立案のための背景や目的、具体的なデータ収集の手続き、Rでのデータ分析、研究のまとめやコメントなどで詳しく紹介。

改訂エンサイクロペディア 心理学研究方法論

W. J. レイ著/岡田圭二編訳 本体5000円＋税

心理学基礎実習マニュアル

宮谷真人・坂田省吾代表編集 本体2800円＋税

心理学教育のための傑作工夫集

L. T. ベンジャミン・ジュニア編/中澤 潤他監訳 本体2800円＋税

わかって楽しい心理統計法入門 Ver.2

松田文子・三宅幹子・橋本優花里著 本体2500円＋税

増補改訂 SPSSのススメ1

竹原卓真著 本体3200円＋税

改訂新版 初めての心理学英語論文

D. シュワープ・B. シュワープ・高橋雅治著 本体1900円＋税

現代の認知心理学 1 知覚と感性

日本認知心理学会監修/三浦佳世編 本体3600円＋税

現代の認知心理学 2 記憶と日常

日本認知心理学会監修/太田信夫・巖島行雄編 本体3600円＋税

現代の認知心理学 3 思考と言語

日本認知心理学会監修/梶見 孝編 本体3600円＋税

根ヶ山光一・仲真紀子 責任編集

第4巻 発達の基盤：身体、認知、情動

心と身体の重要な接点である脳科学・認知・情動に焦点を当て、「生物としてのヒト」の基盤を探りつつ、個体の生から死までの変化過程を考察する人間科学的発達論。 A5判上製336頁/3600円+税

氏家達夫・遠藤利彦 責任編集

第5巻 社会・文化に生きる人間

発達にとっての「社会・文化」とは？ 家庭/家庭外における社会・文化プロセス、社会行動の発達、情動と動機づけなど、多様な切り口で発達のかたちを明らかにする。 A5判上製360頁/3800円+税

マリア・レガスティ 著/大藪 泰 訳

乳児の対人感覚の発達

心の理論を導くもの

乳児の対人理解が他者との情動共有を通して深まっていくとする立場から、「心の起源」「心の理論」をめぐる数々の疑問に客観的データで迫る、乳児研究者必読の書！ A5判並製312頁/3400円+税

川上清文・高井清子・川上文人 著

ヒトはなぜほほえむのか

進化と発達にさぐる微笑の起源

お腹の中で胎児はほほえみ、生後間もない赤ちゃんも眠りながら笑う。微笑のメカニズムにどこまで迫れるか？ ダーウィンにさかのぼる微笑研究の歴史とその最前線まで。 四六判並製180頁/1600円+税

荳阪直行 編 社会脳シリーズ

第4巻 美しさと共感を生む脳

神経美学からみた芸術

社会脳研究の広がりにとめない、絵画・能面などに脳がどう反応しているかが生物学的な立場から探られている。美しさに惹かれ、共感をよびおこす脳のメカニズムとは？ 四六判上製198頁/2200円+税

海保博之 監修/中込四郎・石崎一記・外山美樹 著

ワードマップ ポジティブマインド

スポーツと健康、積極的な生き方の心理学

人が本来もつ強さを引き出すには？ スポーツ心理学、健康心理学に、新たに確立してきたポジティブ心理学をあわせた、積極的な人生追求のための心のサイエンス最前線。 四六判並製232頁/2000円+税

マイケル・ビリッグ 著/鈴木聡志 訳

笑い と 嘲り

ユーモアのダークサイド

笑いのもつ、笑ってすますことのできない社会的・心理的意味とは？ 笑いやユーモアの陰の側面―嘲り、からかいがあらゆる文化に存在することの核心に迫る！ 四六判上製496頁/4300円+税

大石繁宏 著

幸せを科学する

心理学からわかったこと

近年、人が生きるうえで重要なことがらの研究に焦点が当てられるようになり、幸せに関する研究も一挙に進んだ。最新の実証研究の成果をもとに「幸せの条件」を探る。 四六判上製240頁/2400円+税



株式会社

新曜社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-9 第一丸三ビル ■電話03(3264)4973 ■FAX 03(3239)2958

■E-mail info@shin-yo-sha.co.jp ■URL http://www.shin-yo-sha.co.jp/

(表示価格は本体価格)



有斐閣

出版案内 (価格は税込)

東京・神田・神保町2 TEL:03-3265-6811 http://www.yuhikaku.co.jp/

◎図書目録送呈◎

臨床心理学

New Liberal Arts Selection

丹野義彦・石垣琢磨・毛利伊吹・佐々木淳・杉山明子 著

エビデンスベースの観点から臨床心理学の基礎、理論と実際、様々な心理的障害の理解と支援について懇切丁寧に解説。【二色刷】 A5判 四二二二頁 2015年4月新刊

2015年4月新刊

感情心理学・入門

大平英樹 編

有斐閣アルマ二〇五二頁

パスカルから現在までの様々な理論を整理し、生物学的基盤/機能/進化/認知/発達/言語/病理/健康という切り口から読み解く

問いからはじめる発達心理学

生涯にわたる育ちの科学

坂上裕子・山口智子・林 創・中間玲子 著

有斐閣ストウディア一九四四頁

読者に問いかけるQUESTIONS等、親しみやすい工夫が満載。考える愉しみながら理解が深まる新しいタイプの入門書。

スケープゴートイニング

誰がなぜ「やり玉」に挙げられるのか

釘原直樹 編

A5判 二八〇八頁

大きな事故災害の際に生じる特定の対象への非難のメカニズムについて、実証研究から解明。

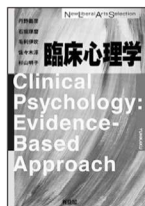
続：心理統計学の基礎

統合的理解を広げ深める

南風原朝和 著

有斐閣アルマ二一六〇頁

近年の心理学や関連領域において広く用いられるようになってきている統計的方法を、前編の内容と関連づけながら解説。



ネットリサーチ 国内No.1の実績

市場調査なら、マクロミル

お任せください!

研究費内でご希望の調査の実現に最大限務めます。

マクロミルでは、学生・研究職(教授、教員、大学講師等)の方を対象にネットリサーチをサービス提供することにより、研究活動の精度向上のサポートを致します。学会発表論文の基礎データとして、数多くの研究職の方からの実績がございます。



アンケート専用モニター数

2,116,338人

(2015年4月1日時点)



取引企業数

5,000社以上



年間調査実績数

20,000件以上



年間調査実績数

243校

株式会社 マクロミル

www.macromill.com

アカデミック担当チーム
teami@macromill.com

〒108-0075 東京都港区港南2-16-1 イーストワンタワー11F
TEL:03-6716-1432 FAX:03-6716-0711

日本感情心理学会第23回年次学術大会

賛助団体芳名（協賛・広告・展示）

株式会社 北大路書房
株式会社 新曜社
東京都中野区
株式会社 マクロミル
株式会社 有斐閣
楽天リサーチ 株式会社

本大会を開催するにあたり、上記企業各位より多大なるご賛助をいただきました。ここにご芳名を記して、感謝の意を表します。

2015年6月

日本感情心理学会第23回年次学術大会準備委員会

委員長 永房典之

大会準備委員会

委員長 永房 典之（新渡戸文化短期大学）

事務局長 伊澤 永修（新渡戸文化短期大学）

大会主委員

有光 興記（駒澤大学） 樋口 匡貴（上智大学） 結城 裕也（立教大学）

大会委員

大久保 暢俊（東洋大学） 佐藤 志緒（東洋大学） 下田 俊介（東洋大学）

鈴木 公啓（東京未来大学） 福田 哲也（上智大学） 細川 隆史（東洋大学）

本田 周二（島根大学）

学生スタッフ

荒井 栞奈 小室 穂乃実 白井 環那 仁科 のぞみ 日置 菜奈 矢ヶ崎千遥

（新渡戸文化短期大学）

池辺 百花 春田 悠佳 宮武 沙苗 山本 晶友 吉田 昌平

（上智大学）

日本感情心理学会第23回大会準備委員会

〒164-8638 東京都中野区本町 6-38-1

新渡戸文化短期大学

E-mail: jsre2015@gmail.com

HP: <http://jsre.wdc-jp.com/conf/2015/index.html>